

お水取りのクライマックス、^{ほんのう} 煩惱を焼き尽くす「^{たつたにいまつ} 達陀松明」は、名張で作られ運ばれる

調進の松明ができるまで

1 檜（ヒノキ）の切り出し
昔は2月10日でしたが、参加者の都合もあり昭和43年より2月11日（祝日）に実施となりました。早朝8時頃に松明衆と極楽寺住職が齋戒沐浴して極楽寺から南へ約1kmの松明山（極楽寺所有）に入り、節のない樹齢100年ほどの良材1本を選び、住職の木霊抜きの読経の後、ナタを入れ伐木されます。



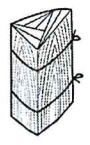
2 切った檜を極楽寺へ
伐木された檜は、約2m間隔に切られ、みんなで険しく狭い山道を約1km先の極楽寺まで担いで運びます。



3 檜の皮をむく
極楽寺の境内に着くと、本堂の前に筵（むしろ）を敷き、その四隅に竹を立てしめ縄を張った中で作業が行われます。まず初めに、檜の丸太をさらに1尺2寸（約36cm）に切り、ナタでいねいに皮をはがします。



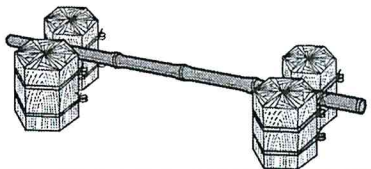
4 松明調製
1 昔からの作り方・寸法に従い、木を切り、ナタで割り、切り口をクサビ型の二等辺三角形にしたものを一定枚数作ります。
2 作った板を6~8枚で扇状に組み合わせ、2ヶ所をヒモでくくりませ。これを1把（わ）と言います。



3 2の工程で作った1把の組を7・8把組み合わせるとヒモで縛り、これが1束（そく）となります。7把組みと8把組みをそれぞれ10束づつ、合計20束作ります。



5 完成
7把ものと8把もの各1束づつを長さ2m程の青竹の両端にくくり付けて完成です。これを一荷（いっか）と言ひ、全部で5荷作ります。



松明調進（松明送り）経路

※松明送りの一行は、講長、住職、香水衆、松明衆と多数の随伴参拝者から構成されています。古くから一定の形で作られた5荷の松明には、それぞれコモを当てる包み、松明が地面に着いても土がつかないように配慮されています。



完成した5荷の松明を担いで（現在は一部バス）東大寺へ。南大門で出迎えを受けた後、二月堂に上堂して奉納の儀を厳修（ごんしゅ）して納めます。納められた松明は1年間置かれ、翌年に二月堂内陣（お堂の中）で達陀の際に煩惱を焼き尽くす松明として用いられます。

<http://www.e-net.or.jp/user/taimatsu/> で詳しくご覧いただけます。

春を呼ぶ会

本会は伊賀一ノ井松明調進行事及び同松明講を名張市内外に知らしめること
によって、名張の文化を次世代に継承、または継承するためのお手伝いをす
ることを目的とする会です。
本会は、名張市在住の個人及び団体によって構成されます。
本会は次の事業をおこないます。
1. 伊賀一ノ井松明調進行事及び同松明講を名張市内外に知らしめる事業
2. 名張の文化を継承、維持するための事業

※本会の事業取り組みが日本ユネスコ協会連盟に認められ2011年に
「未来遺産」プロジェクトに認定されました。

事務局 / 名張市南町 822-2
名張市産業振興センターアスピア1F
（社）名張市観光協会内 Tel0595-63-9148

伊賀一ノ井松明調進行事
プロジェクト推進委員会
伝統行事を支えていく
未来の担い手育成事業

どうして一ノ井で作られた松明がお水取りに使われるようになったのでしょうか？これにまつわる伝説が地元「道観長者」として残されています。

今から800年ほど昔、赤目町一ノ井に、伊賀の国で一番の大金持ち「道観長者」が豪壮な屋敷を構えて暮らしていた。9つの郷を治め、農民を虫けらのように働かせ、自分は酒と女におぼれ、それはたいへんな乱れようだった。長者には三男一女がおったそうで、長男と次男は病死、奥方の小満は体が腐る病にかかってしまった。このため一族は村外追放を御上から命ぜられ、人里離れた香落溪の八幡に移り済み、「八幡長者」と呼ばれるようになった。三男の小太郎は13歳。母の病気を直すため、熊野や伊勢へ参拝を続け、長者も自分の過去を深く反省するようになった。そしてある日、長者は自分の財産を世のために使おうと決心。まず島ヶ原に広国寺を再建、正月堂と名付け、平家に焼かれた奈良・東大寺

の復興に努めた。この頃若狭の南無観長者と出会い、意気投合。二月堂を再建し、そして檀家に入り、「我が私有地を二月堂に寄進し、松明を毎年二月堂の修二会に納めるのだ。」という遺言を残してこの世を去ってしまった。残された小太郎が寂しく暮らしていたある日、盗人に忍び込まれ、母や姉を殺されてしまった。その後、小太郎は仇を討てたが、皆の弔いのために奈良へ出て、出家し、「聖玄」という立派なお坊さんになった。これらのいきさつから二月堂への一ノ井の松明寄進は道観長者の遺言で始められたと言ひ伝えられている。

※このお話には、ハンセン病（ライ病）を連想されるくじりがあります。古くは不治の感染症として患者を差別する風潮がありましたが、現在においては、感染力が弱いこともわかり有効な治療法も確立され、不治の病などではありません。このお話では、地元の伝承を忠実に掲載していますが、決して差別を助長する意図のものではありません。